
離れ離れになっても

特盛り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離れ離れになっても

【コード】

N9694D

【作者名】

特盛り

【あらすじ】

一つの事件をもとにいろいろな人やものが壊れたりします。

ありきたりな中で

突然ですが、あなたは何人の人間を殺したら殺人鬼だと思いますか？
さらに質問です。なぜ人間は人間を殺そうと思っではいけないのですか？

「ほら見てくださいよ。デザートイーグルです。見ているだけで惚れ惚れしますよ。」

「ああ、また銃か。デザートなんて聞いたもんだから、やっと女の子らしくなつたと思っただけじゃねえか。というよりも昨日の銃とどこが違うんだよ？」

「ジェリコ941とデザートイーグルの違いも分からないのかい君は、だめだなあ。フフフ・・・。」

「うるせえよ。俺は、絶対にそんな物騒な趣味、分かりたくもないね。お前こそもう少し女らしく。」

「この銃と昨日の銃とのちがいは
（中略）
なんですよ。」

で、この銃を使用するにあたって注意しなければいけないのはですね・・・（以下略）。
こんなに朝早くから、フルスロットルで拳銃の話をつっかけてくる女はこの、アホで拳銃のことしか頭にない峰台鈴音くらいだろう。この女がどれ位銃が好きかというと、（偏見が入っているかもしれないが）普通的女子が他人の噂話をするのと同じくらいだろう。ちなみに俺は、この女がかなり苦手だ。人の揚げ足は取るし、場の空気をぶち壊しにするし、この前なんかは男子生徒を泣かせて笑っていた。

とりあえず現状報告をしようと思う。今は、学校へと続く上り坂をあの女の話から逃れる為に猛ダッシュしているところだ。しかし、

この女の厄介なところは底無しの体力。いくら俺が必死に走っても、息ひとつ切らさずに銃の話をしながらすぐ追いついてくる。

ここまでくると、女子に負けている悔しさよりも恐怖のほうが勝ってしまう。

「すまん、俺の、負けだ。もう、許して、くれ。」

息を切らしながら白旗をあげる俺に

「なんだい？もう終わりですか。つまらないなあ。」

と、本当につまらなそうな顔をして言いやがる。このとき俺はこの女に復讐を誓った。

俺の通っている学校は決して、頭がいいわけでもなく、美人が多いわけでもない、といったような、至って普通の私立高校で、金さえ払えば入れるようなところだ。でも、ここに通っている生徒は、変な奴らが多い。

たとえば、自称・超能力者や自称・光の国からきたウル　ラマン、そういう俺の近くにも自称・美少女ガンナーっていうのも居たっけな。

まあ、そんな学校だからこそスポーツ推薦切り捨ててまで受験したっていうのに、あいつと再会する羽目になってしまったのか、今でもよく分らない。

鈴音とは三歳ぐらいからの幼馴染で、昔はこんなではなかったと思う。たしか、もっと可愛くて、普通の女子だった。もっとも顔立ちには変わらないけどな。

そんな、俺が大好きだった鈴音は、中学校の入学式の前日に自殺未遂をした。なんとか一命は取り留めたものの、精神に異常が見られるため長期期間の入院をすることになった。

俺は、毎日病院に通った。鈴音の病室に足を運んだ。でも、あいつはいつも寝ていた。

起きていそうな時間を狙って行くと、いつも「面会謝絶」という張り紙がしてあった。

でも俺は、起きている鈴音に会いたくてあいつの病室に忍び込んだ。あいつは、ベッドに腰掛けていた。でもそいつは、鈴音ではなかった。鈴音に似た悪魔だった。その悪魔は、俺を見つけると笑いながら、近くにおいてあった果物ナイフを俺に向かって投げつけてきた。運良く心臓は外れたものの、出血の量が半端じゃなかった。下手をしたら死んでいたかもしれない。医者にも怒鳴られた。それ以来あいつの部屋には鍵がかけられ、二度と入れなくなった。あの自殺未遂からちょうど5年になる入学式にあいつがいた。正直、怖かった。初めの一週間は、気付かれないように努力したけど、クラスの女子にグループができた頃になって、見つかってしまった。性格はがらりと変わっていたが、あの悪魔のような雰囲気ではなかったのが唯一の救いだった。

「どうした？色男くん。君のファンが十人くらい走ってきてきそうだね。」
「ポーンとしていた俺を夢から引きずり出すように声をかけてきた。はっとした俺は、周りを見渡した。」

「なんだ？脈略もなく…。誰もいないじゃねーかよ。俺に嘘は通用しないぜ。」

「じゃあ本当のことなら通用するんだね。五秒前、四、三、」
秒読みまで開始しやがった。なぜそこまでして俺を騙そうとするのかよく分からない。

「二、一。」
ドタドタ走る音が聞こえてくる。まさか、ありえるわけないだろ…。

「ゼロ。」

その掛け声とともに約十人の女子が俺の視界に入った。

「逃げるぞ。鈴音。」

「了解です。隊長さん」

鈴音は返事をするのとはほぼ同時に、左手に握り締めていたあれのトリガーを引いた。

パアアアアアアアアアアア

という乾いた音になるとともに女子たちの足元に五発の銃弾が飛び土煙を上げた。正直、かなり驚いた。俺が驚いたのは鈴音の銃の腕よりも、その拳銃だった。

「あのですねえ。鈴音さん？」

「なんだい？××くん。なにか質問があるのかい？」

「やっぱり逃げ切つてからでいいや。」

「そうですね。・・・いいですけどね。」

何故か鈴音はニヤついていた。

「はあ、やつとにげきれたよ。」

「おめでとう××くん。それで質問とはなんだい？」

「あ・・・。そうだったな。簡潔に聞くけど、それ本物？」

「ああ。そうだよ、××くん。これは本物だ。」

「えっ、そこあつさり認めるのかよ。銃刀法違反だろ。」

「僕には法律なんて関係ないんだよ。分かってくれるかい？」

「分かつてるよ。どうせ俺がその銃を認めなかったらここで殺すつもりだろ。」

「よく分かつているね××くん。僕はもう打つ気まんまんだったよ。」

「

「おい。目が笑つてないぞ。」

「××くんは、いまにも目から涙が溢れてきそうだよ。フッフ。」

鈴音の目は、泥水のようににごっていた。

誰か助けてください。

「ま、待ってくれ。なんでもする。何でもやるからやめてくれ。」
「え、ホントですか。何でもしてくれるんですね。良かった。」
その少女の笑顔は、とてもきれいだっただ。
「ああ、何でもするよ。」
「じゃあ、三人目の人になってもらえませんか。」
と、いいながら少女は頭を下げた。
「三人目の男になればいいのかい？」
少女は、少し不思議そうな顔をしてから
「まあ、言い換えればそういう事だと思いますよ。」
「なら、交渉成立だな。」
男は、そう言った。
すると少女は、男の第一ボタンに手を掛けた。

「おっはよー。xxくん。」
「おう。おはよう、ナタ。」
「おはよう。ナタさん。」
「お…おはようございます。」
鈴音が現れたとたん表情が曇った気がする。
「ナタ。元気ないな、熱でもあるのか？」
鈴音のことが怖いんだろうと、応援の意味もこめて頭を撫でてやった。しばらく撫でていると、意味の分からないことを口走りながらぶっ倒れた。ナタの頭はかなり熱かった。気のせいか、顔から煙が出ている。教室の片隅で女子達が「鈍感だ、鈍感だ。」とか嘆いているが、わけが分からないことを言っている女子達に構っている暇はないのでナタを保健室に連れて行くことにする。
「あんなに鈍感、鈍感と言われているのにねえ。見ていてかわいそうですよ。君もナタさんも、もちろんクラスの女の子達もね。」

「俺がかわいそうっていうのはなんとなく分かるけど、何でナタやクラスの女子まで？」

「これは傑作だよ。ここまでヒントをあげているというのに、それでも分からないとはね。君は真正銘の鈍感君だよ。僕が保証するよフフフ……。」

「お前さあ、その笑い方やめたほうがいいぞ。すつげえ不気味。」
鋼鉄の塊のカチャという音と共に体中の血がためたくなった。

「××君。あまり聞こえなかったからもう一度言ってもらえないかな。」

「お前そんなに耳が悪いわけじゃあないだろ。」

「安全装置を外してなかったよ。フフフ……。」

カチャ

「ごめんなさい。許してください。」

「あやまってくれるならいいよ。君にはとことん甘いなあ、僕も。」

「あのさあ、鈴音」

「なんだい？××くん。」

「まだ銃口が俺のほうを向いてるんだよ。」

「おお、すまない、すまない。忘れていたよ。」

「お前はよくもいけしゃあしゃあと……。」

「フフフ……。」

「呑気に笑ってる場合じゃないだろ。」

「××くん。きつとこういうのをお約束って言っただろっね。」

「お前といると命がいくつあっても足りないよ。」

「なにか言ったかい？××くん。」

「いや、何でもない。」

「××くん、朝は本当にありがとね。」

「素質の問題ですよ。」

「何だよそれ。」

「間違つてはないと思いますよ。」

「一発殴らせてもらってもいいか？」

「じゃあその代わりと言つてはなんだけど、今日はうちに泊まっていけないかい？」

マジで？

「じゃあそういうことで決まりだね。ナタさんも来るよね？」

「えっ・・・本当ですか？ありがとうございます。ふつつかものですが、よろしくお願いします。」

「ナタ・・・その挨拶は少し違うと思うんだが。」

「フフフ・・・これは傑作だよ。」

こいつの笑いのつぼは一般人とはかけ離れているということを俺は再認識した。

「きみたち付き合ってしまった方がいいのに・・・。そうしたらもっと面白いのになあ。」

やつぱりかけ離れてるな。うん…。

ラジオから殺人事件のニュースが流れてきた。

例の惨殺事件に三人目の被害者が出ました。警察は、この一連の殺人事件は複数のグループが協力してやっているとみて捜査を続けています。

正直こんなに大きく取り上げられるとは思っても見なかった。でも、警察に追われるというスリルと、目の前が一気に真っ赤になるあの行為に快感を覚えた。たぶん、もうこの快感から抜け出すことは絶対にできない。

「いやあ、そう言えば懐かしいなあ。××くんが僕の家泊まりに来るなんてねえ。小学六年生以来じゃないか。あるときだよ、初めて他人に胸を触られたのは……。」

「えつつつ？××くん、そんなに女子の体に飢えてたの？」

「そうだよ。あのとときの××くんときたら、“一日一回鈴音を抱きしめないと夜もまとともに眠れない”なんていつてたくらいだからね。」

俺が鈴音のお父さんと小学校の時の話に花を咲かせているうちに鈴音達にはアルコールが入っていた。

「おい、そのガセネタで盛り上がってるお二人さん。その辺りでやめといたほうが良いぞ。俺のなかのいろんな感情が今にも爆発しそうだ。」

「それは僕への愛かい？「死ぬか？」フフツツ……冗談だよ。でも僕と君の仲じゃないか、××くん。そうだ、小六のときみたいにお医者さんごっこでもしないかい？今回もいつもどおりちゃんとおくまで見せてあげるよ。」

「俺はそんな十八禁が掛かりそうな遊びをしたことなんかねえよ！」

「フフフ、愛しているよ××くん。」

「話がかみ合ってるねえぞ！フーか抱きつくなよ。」

「フフフ……。」

「フフフじゃねえよ。おい、鈴音！今すぐ俺から離れる。」

「……。」

「おい、鈴音！」

「……zzz。」

鈴音は俺に抱きついたまま眠ってしまった。

「……で？そこにある三十本の缶のうちこいつは何本飲んだんだ？」

俺は、無言で一部始終を見ていたナタに聞いた。

「えつと……。私が飲んだのは三本かな。」

明日は鈴音の世話は大変なこと間違いないな。

ナタと鈴音を布団に寝かせてから散歩をするために町に出た。しばらく歩いていると後ろの方からおかしな視線を感じるようになった。

ひとまずあの路地で待ち伏せすることにしようと思った矢先、後ろの視線の主が話し掛けてきた。

「もしかして××くん!？」

「はい、そうですけど。どちらさまですか？」

「ひどいなあ。君のファンクラブの会長だよ。」

「へえ、そうなんだ。お疲れ様。じゃあ、おやすみ。」

「××くんが四人目か・・・。うん、そうしようつと。」

「お前。今なんて言った？」

「えっ・・・。××くんが四人目で言いかナって思ったの。」

「まさか、こんな近くに殺人鬼がいたなんてな。笑い話にしかかなねえよ。」

「やっとあたしの言ってる事を分かってくれる人に出会えたよ。」

「お前に構ってる時間も、お前と遊んでる時間もないんだ。おあいにくさま。」

「男のくせに、にげるんだ・・・。」

「ああ、男だつて怖がるし、そりゃ殺人鬼が目の前にいるんだから逃げもするさ。」

「・・・そんなダメな奴は内臓ぶちまけて死んじゃえ・・・で、」

少女の目の前にはすでにだれもいなかった。

「起きろ鈴音、もう朝だぞ。」

「おはよう××くん。うえっ・・・気持ち悪い。」

「ほら、水と頭痛薬だ。飲め。」

「だから、前から言ってるじゃないですか。僕は薬が苦手なんですよ。」

「いいから飲め。」

「だから何度もいわせないでくれよ。××くん。」

「飲め。」

「いやだ。」

「飲め。」

「××くんが怒るなんて珍しいな。ア、アハハ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ごめん、××くん。飲むから許してくれ。」

ゴクン

「飲めばいいんだよ飲めば。」

「ところで学校はどうしたんだい？」

「休んだ。」

「ナタさんも休んだなんていわないだろうね。」

「ああ、大丈夫だ。一人で行ってもらった。」

「ならいいんですよ。」

「話変わるけど、昨日、例の連続殺人事件の犯人に会った。」

「嘘ですよね！？じゃあなんで君はここにいるんだい？」

「逃げてきた。」

「追いつかれなかったのかい？」

「ああ。」

「良かったよ。僕も話し相手がいなくなると困りますからね。・・・

それで、犯人は誰だったんです？」

「俺のファンクラブの会長。」

「フフフ・・・それは傑作ですね。」

この事件は五年前の事件に似ていますね。

ニユースではそんなことを言っている。五年前の事件とは、五年前に俺達の住んでいるこの町で起きた連続猟奇殺人事件だ。ちなみに、被害者は十五人。どれもまずたに引き裂かれた死体で見つかった。もうあそこまでいくと、殺人鬼じゃなくて殺戮兵器って呼ばれるらしい。あの時は、朝から晩まで警察が町にいたし、学校もほとんど集団下校になった。一人殺されるたびその近辺の調査に力が入った。結局、犯人が見つからずに忘れ去られてその事件は終わった。

この事件の犯人を知っている人間は、おれが知ってるだけでも二人いる。俺と鈴音。まあなんで知ってるかはもう少ししたら話そうと思う。

「おい、なたあ……聞こえてる？」

「あ……う、うん。聞こえてる聞こえてる。聞こえてるよ……うん。」

「あーあ、ナタが××のことしか考えないから私はつまらないよお……。」

「えっ、そんなことないよ。あたしは世界で一番あなたを愛していますよ……ファンクラブ会長。」

「またまた、そんなに私を愛してもなにも出ないよ。」

そんなことを言っ二人で笑っ「いようと思っ」 今日だけは

鈴音が寝静まっ「たので今日はこちらから殺人鬼に会いに行くことにした。」

住所はもう確認してある。別にあのファンクラブの会長が殺人鬼だ

とは思ってない。だけど、今向かってるのはファンクラブ会長の家。さつき、ナタから電話で「転校するらしいからなんかしてあげて」とか言われたからしかたなく向かってるだけなんだけど何してやればいいのか分からない。

ピンポン

ガチャ

「よう。」

「えっ……。xx君？」

「転校するんだって？」

「うん。本当はね。」

「あの時、言おうとしてたんだろ？」

「うん。でも。」

「俺に殺人鬼の疑いをかけられて、つい話に乗ってしまったんだろ？」

「私、ノリがいいからね。だけど。」

「きちんと言おうとした時には、俺はそこに居なかった。」

「そう。で。」

「あきらめたんだろ？」

「もう！私のセリフ全部とらないでよ！！」

「ハハ、ごめんごめん。」

「全然悪いと思ってないでしょ！！」

「ばれた？」

「噛み千切るよ！？」

「ごめんなさい。」

「でも、来てくれて嬉しかった！！ありがとう。」

「何もしてやってないぞ？こんなんでいいのか？」

「うん。じゃ、キスして？」

「げっ、マジ？」

「げっ。って何？」

「じゃあ、目えとじろよ。」
「ん。」

マジで目閉じたよ(汗)。どうしよう……。迷った拳句、俺はデコピンを発動してしまった。

ビシイイイイ

「いったああいー!」

「かなりいい音したなあ。」

「舌噛み切るよ!？」

「どうぞ、ご勝手に。」

「もちろん君のだよ?」

「勘弁してください。」

「もういいよ!!帰って!!君はこの世の中の為に死んだほうがいい!!」

「分かった。帰りますよ。」

俺が言うなりファンクラブ会長さんはそっぽを向いてしまった。・
・ファンクラブ会長?こいつの名前ってなんだっけ?
・会長さん?

「何!？」

「何!？」

「……名前なんだっけ?」

「あやめ……祈祷あやめ。もういいでしょ!!帰って!」

「あやめ。」

「……。。。」

「祈祷あやめ!」

「何ひとつの名前叫んでんの!？」

めっかが、そっぽを向いたままの形での会話。

「こっち向けよ。」

「なんできみのために動かなきゃないの?」

「いいからこっち向けよ。」

「やだ。」

「いいから。」

「やだつていつてんの。」

「いいから向け。」

「分かつ」

俺は、あやめの口をふさいだ。・・・かなり恥ずかしい方法で。

大丈夫。舌は入ってないから、噛み切られることはない。

「なつ、何すんの!？」

俺は、恥ずかしさのあまりもうそこから走り去っていた。

ファンクラブの会長の家への訪問も無事終了した(無事なのは、正直微妙だが)が、俺にはもう一つやらなきゃいけないことがある。それは

「こんばんは。殺人鬼さん。」

殺人鬼さんとお話し合い。

「xxくん、その呼び方は失礼だよ。フフフフ……………」

「いやいや、実名的確な名前だと思ってるけどなあ。」

「間違つてはいないけどね。」

「そんで?今日のターゲットはどちら様?」

「フフ……………。空気は吸うだけじゃなくて読まなきゃいけないんだよ。」

そう言うとそいつは、警察が見つけたら絶対に捕まるであろうサイズのナイフを俺に向かって突き出した。刺さりはしなかったものの、左腕に掠つて血がふきだした。

「いくらなんでも言葉と武器で同時に攻撃するのはひどすぎだろ。」

「うるさいなあ……………xxくんはつつ!!」

そついいながら殺人鬼さんは、ナイフを振り上げた。

ザク

俺は、隠し持ってたカッターを左手の親指の辺りに突き刺した。

「……………」

ザク

「いや・・・孤独なつて意味だから間違つてはない。」
「ふん。それで？左手は何で昔みたいになつてんの？」
「一応、あのときよりは未来だつて分かるんだ。」
「それくらいはね。あんたが無駄にでかくなつてるから。」
「それはお前の胸もだぞ。」
「なんで分かるのよ？怒らないから言いなさい。」
「怖いから表情だけ笑うのはやめろ。」
「まあ、この話は後でじっくりするとして、あのときから何年後？」
「5年後。この5年間はお前の代わりの人格がお前として行動してた。」
「まあ・・・そんなことだろうと思つたわよ。」
「勘の鋭い女だな。」
「それより、何でまたカッターを刺したの？」
「いや、五年前みたいに自分を傷つけたら、ショック療法みたいにもとに戻ると思つたからさあ。」
「お前はバカか！！早く止血しなさいよ。死ぬわよ！」
「あなたの寿命は残り3分です。」
「へえ、そうなんですかあ。ウル ラマンみたいっすねえ。」
「独り芝居してる場合じゃないのよ！！あんた、死にたいみたいね。」
「お前は、さつきショック死したんじゃないか？」
「そんなこといいから・・・って勝手に殺すな！！」
「でも本当に久しぶりだな。」
「私が帰ってきててもあんたが死んだら意味ないじゃない！」
「お前何泣いてんだよ。お前も切れたり泣いたり忙しいな。」
「五年ぶりの本物の鈴音との会話を楽しんでるうちに、意識がだんだん遠のいてきた。」
「よく考えたらさ。」
「何よ？」
「お前の学力は小学6年生と一緒になんだよな。」

「そうだった。どうしよう!?!」

「問題です。比例定数が5のときのyの値を比例の式で表しなさい。」

「……Y=5Xかな?」

「正解。」

そこで左手から血をだらだら流してる俺の意識はぶつつり途絶えた。

- a f t e r -

「なんとか一命を取り留めた後の病院で」

「そういえば、私の代わりの人格ってどんなだった?」

「えっと、一言で表すと、拳銃オタク、大酒飲み、性格最悪、笑い方が不気味、しゃべり方が変、男勝り、人殺し、銃刀法違反者、あとは」

「……もういいや、一言じゃないし。……イメージアップに必要とされる時間はどれくらい?」

「少なくとも3ヶ月だな。」

「三年生までに間に合うならいいや。」

「あつ……忘れてた。」

「何!?もつとひどいのがあるの?」

「おかえり、鈴音。」

「うん……ただいま。」

「まあそれは置いていて、あの箱はなんだ?」

「あ……私、引越してるの。」

「どこに?」

「あなたの部屋。」

「……よく聞こえなかったからもう一度言ってくれ。」

「あなたの部屋。」

「あのボロアパート？」

「ボロいし汚いあのアパートのあなたの部屋。」

「どうということだ？」

「ふつつかものですが、よろしくお願いします。」

五年前にあった殺人事件にも触れようと思ったけどそれはまた今度機会があったらということだ。

- e n d -

ありきたりな中で（後書き）

い。誤字脱字その他もろもろあるかもしれませんが、大目に見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9694d/>

離れ離れになっても

2010年12月31日22時12分発行